

【フランクの音楽】

今年生誕 200 年を迎えるセザール・フランク(1822-90)は、ベルギーのリエージュに生まれ、パリ音楽院で学んだ。そうした生い立ちも大いに影響しているのだろう、その音楽にはフランス的な色彩美とドイツ的な堅牢性が融合している。教会のオルガニストやピアノ教師として生活しながら作曲を続けたが、それが花開いて傑作群が生まれたのは実に 60 歳に近づいた頃だった。二短調の交響曲、ピアノ曲「プレリュード、コラールとフーガ」、そして今回演奏される「ヴァイオリン・ソナタ」や「ピアノ五重奏曲」などは、全てその晩年に書かれ、現在も屈指の名品として音楽史に輝いている。

3 声のミサ曲 より 天使のパン

クリスマスなどにも歌われる、清らかな旋律をもった「天使のパン(糧)」は「3 声のミサ曲」(1860)に挿入された 1 曲。1872 年に作曲され、中世の神学者トマス・アキナスが聖体祝日のために書いた「Sacris Solemnis」の終わりの 2 節が歌われる。今回はヴァイオリンとオルガンで演奏される。

3 つのコラール より 第 3 曲

フランクが亡くなる年に書いた最後の作品。速いカンタータ部分と静かなアダージョのコラールが交替しながら進み、J.S.バッハの音楽から学んだであろうポリフォニーに荘厳さが滲み出る。敬虔なカトリック信者として、またオルガニストとして長く活躍しながら、独創的な作品を残したフランクの個性が存分に感じられる。

ヴァイオリン・ソナタ

古今東西のヴァイオリン・ソナタのなかでも、最も有名なものの一つ。作曲は 1886 年で、ベルギーの大ヴァイオリニスト、イザイに献呈された。多彩な音色のうちに夢幻的かつ噴き上げるような情熱と深い瞑想が共存している。第 1 楽章の半音階的な和声進行で生まれるゆらぎ、第 2 楽章の華麗で激情的なアレグロ、第 3 楽章の自由で静かな瞑想、そして一転して愛らしい主題がカノンで展開するフィナーレ……フランクの代名詞でもある「循環形式」が際立ち、主要テーマが全楽章に現れることで、曲全体に統一感が付与されている。

ピアノ五重奏曲

1878 年から 79 年にかけて作曲され、晩年の傑作群の口火を切る一作となった。実は、フランクがピアノおよび室内楽作品を手がけたのは 30 数年ぶりだった。(リストにも認められたほどの)フランクのピアニストとしてのヴィルトゥオーゾぶりを彷彿とさせるピアノ・パートと弦楽パートの重厚さは、ブラームスの同名曲を想わせる(調性も同じ「へ短調」であり、フランクもこの曲を意識していたかもしれない)。本作でも「循環形式」や半音階的進行が駆使され、変化に富んだ劇的な両端楽章、奥行きのある静謐な第 2 楽章すべてが、内向的なトーンの中で独自の光を放ち、存分の聴き応えをもたらしてくれる。